中日新聞　2015年11月24日（火）朝刊

言葉の壁越え 夢つかむ

外国ルーツの仲間たち奮闘

外国にルーツのある高校生たちが、言葉や経済的な壁を乗り越えて夢をつかもうと奮闘している。ひと足先に将来に向かって踏み出した“先輩”の一人は、「二つの国を知る僕たちだからこそできることがある。夢をあきらめないでほしい」と伝えている。（山口遼子）

学習支援室で同村さん(中央)らと(ペルー出身豊橋市で)

愛知県豊橋市のNPOが運営する学習支援教室。日本生まれで親が外国人だったり、親の仕事でペルーなどに住んだりした経験のある高校生たちが集まる。日本語や学習の遅れから自身もつらい思いをしてきたという。

「パパは俺の『パスポート』だ」。ペルー出身の中間さん（17）＝豊橋市＝は、学習支援室の「先輩」である高校1年生のモニカさん（16）は「通帳」を見せてくれた。「パパは俺の『パスポート』だ」。ペルー出身の中間さん（17）＝豊橋市＝は、学習支援室の「先輩」である高校1年生のモニカさん（16）は「通帳」を見せてくれた。

金融機関への就職を考えるペルーにルーツのある高校1年生のモニカさん（16）は「通帳」を見せてくれた。

父親がペルーで、母親がブラジル出身。日本語は「ちょっとだけ」しか話せない。中学2年の時、両親の仕事で来日した。言葉が通じない学校生活は「地獄」だった。

「ペルーでは『ばか』『あほ』なんて言葉、使わない。でも日本では『ばか』『あほ』ばっかり言われる。『ペルーに帰れ』とも言われた。ペルーに帰りたくなかった。でも、ペルーに帰ったら、『日本に行ったくせに』って言われる。どっちにも行けない。ずっとそう思ってた。でも、ここに来てから、『ペルーの人間だから、日本の人間だから、両方の言葉を使えるから、仕事ができる』って言われるようになった。ペルーの人間だから、日本の人間だから、両方の言葉を使えるから、仕事ができる」

モニカさんは、学習支援室の「先輩」として、中学生の学習を手伝う。「ペルーの人間だから、日本の人間だから、両方の言葉を使えるから、仕事ができる」と言う。

「ペルーの人間だから、日本の人間だから、両方の言葉を使えるから、仕事ができる」

ペルーにルーツのある高校生たちが、言葉や経済的な壁を乗り越えて夢をつかもうと奮闘している。ひと足先に将来に向かって踏み出した“先輩”の一人は、「二つの国を知る僕たちだからこそできることがある。夢をあきらめないでほしい」と伝えている。（山口遼子）

「僕たちだからこそできる道」

学習支援室で同村さん(中央)らと(ペルー出身豊橋市で)

愛知県豊橋市のNPOが運営する学習支援教室。日本生まれで親が外国人だったり、親の仕事でペルーなどに住んだりした経験のある高校生たちが集まる。日本語や学習の遅れから自身もつらい思いをしてきたという。

「パパは俺の『パスポート』だ」。ペルー出身の中間さん（17）＝豊橋市＝は、学習支援室の「先輩」である高校1年生のモニカさん（16）は「通帳」を見せてくれた。「パパは俺の『パスポート』だ」。ペルー出身の中間さん（17）＝豊橋市＝は、学習支援室の「先輩」である高校1年生のモニカさん（16）は「通帳」を見せてくれた。

父親がペルーで、母親がブラジル出身。日本語は「ちょっとだけ」しか話せない。中学2年の時、両親の仕事で来日した。言葉が通じない学校生活は「地獄」だった。

「ペルーでは『ばか』『あほ』なんて言葉、使わない。でも日本では『ばか』『あほ』ばっかり言われる。『ペルーに帰れ』とも言われた。ペルーに帰りたくなかった。でも、ペルーに帰ったら、『日本に行ったくせに』って言われる。どっちにも行けない。ずっとそう思ってた。でも、ここに来てから、『ペルーの人間だから、日本の人間だから、両方の言葉を使えるから、仕事ができる』って言われるようになった。ペルーの人間だから、日本の人間だから、両方の言葉を使えるから、仕事ができる」

モニカさんは、学習支援室の「先輩」として、中学生の学習を手伝う。「ペルーの人間だから、日本の人間だから、両方の言葉を使えるから、仕事ができる」と言う。

「ペルーの人間だから、日本の人間だから、両方の言葉を使えるから、仕事ができる」

朝日新聞　2015年12月27日（日）朝刊　27面

外国籍高校生ら 労働体験

中区

外国籍や外国にルーツを持つ高校生ら25日、名古屋市中区の東海労働金庫で「職場体験」。労金職員の話に細い目を向け、「接客は第一印象が大事」「現金の取り扱いは慎重に」。高校生や専門学校の講師らの注意点を、「出社前の身だしなみ」「ビジネスマナー」などの項目に分けて説明した。

国籍はブラジルやペルーなどの人たちが職場を見学した。ペルーにルーツのある高校1年生のモニカさん（16）は「通帳」を見せてくれた。「パパは俺の『パスポート』だ」。ペルー出身の中間さん（17）＝豊橋市＝は、学習支援室の「先輩」である高校1年生のモニカさん（16）は「通帳」を見せてくれた。

父親がペルーで、母親がブラジル出身。日本語は「ちょっとだけ」しか話せない。中学2年の時、両親の仕事で来日した。言葉が通じない学校生活は「地獄」だった。

「ペルーでは『ばか』『あほ』なんて言葉、使わない。でも日本では『ばか』『あほ』ばっかり言われる。『ペルーに帰れ』とも言われた。ペルーに帰りたくなかった。でも、ペルーに帰ったら、『日本に行ったくせに』って言われる。どっちにも行けない。ずっとそう思ってた。でも、ここに来てから、『ペルーの人間だから、日本の人間だから、両方の言葉を使えるから、仕事ができる』って言われるようになった。ペルーの人間だから、日本の人間だから、両方の言葉を使えるから、仕事ができる」

モニカさんは、学習支援室の「先輩」として、中学生の学習を手伝う。「ペルーの人間だから、日本の人間だから、両方の言葉を使えるから、仕事ができる」と言う。

「ペルーの人間だから、日本の人間だから、両方の言葉を使えるから、仕事ができる」

朝日新聞　2016年1月8日（金）朝刊　34面

日本語指導 先生は学校へ

緊急支援 4市の小中学校

政課後、日本語を教える愛知教育大の学生＝愛知県豊明市二村台7丁目の双葉小学校

外国人のニッポン

文部科学省は、日本語指導が必要な児童・生徒は約3万7千人在籍し、2割を超す約7800人が愛知県で多い。小中学校では、外国人児童の増加や、「言葉の壁」などが、進学や就職の進路に影響する課題だ。2人の学生が参加した「一日コーディネーター」体験を通じて、学習支援の大学生ボランティアの支援などを探った。（小坂洋一）

会長は「外国籍の子どもたちが安心して学べる環境づくりを」と話している。

「先生は学校へ」

親近感を持つ」と話す。

ただ、学生が教えるのは、日常の風景や生徒がいつも学ぶ教室。教科書を使った授業は、学生が学んできたことを生かせるかどうか。

「一月一日は祝日だ。先生はどうして学校に来ないの？」

ベンガル語で問いかける。

「先生は学校へ」

同小学校は、外国人児童の学習支援を補充する。来週から、週1回、大学生の派遣を始める。

教育の支援に力を入れている愛知県は、地元の愛知教育大（愛知県刈谷市）が日本語教育・生徒が全国で最も多い愛知県の小学校で、学生が教える。

日本語指導が必要な児童

12月9日、愛知県豊田市の双峰小学校では放課後、日本語指導を4学級で行った。先生役は教育実習中の学生。

「先生役は学生。教育実習の学生が、子どもたちに教える。学生は、子どもたちに教えることで、学ぶ。学生は、子どもたちに教えることで、学ぶ。学生は、子どもたちに教えることで、学ぶ